

作目名	はくさい
-----	------

作型名	秋冬どり（平坦地）
-----	-----------

月 旬	1			2			3			4			5			6			7			8			9			10			11			12			品種
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下				
秋冬どり																															黄ごころ 75						
																															大福						

○ は種 △定植 ■ 収穫

○技術体系設定の前提条件

- (1) 対象地域 岐阜、西濃、中濃
- (2) 立地条件

①気象条件

発芽は32℃まで高温のほうが早いですが、28℃を越えると腐敗が増える。実用上は24℃付近が適当である。生育初期には高温にも耐えるが、結球期が22℃以上では、心腐れや軟腐病が多発する。球の充実には、15～18℃が最適とされ、13℃以下では結球が遅延する。現在の秋まき用品種の多くは、5℃、3週間以上で花成に進み、長日はこれを促進する。

②ほ場条件

有機質に富んだ肥沃な沖積土が最適である。土壌酸度は弱酸性を好むが、酸性では根こぶ病が発生しやすい。安定多収を目指すには、養水分の必要量のみでなく、保水性に優れるとともに、排水が良好で、緩衝能の高い、深い耕土が必要である。堆きゅう肥や粗大有機物は、養水分供給を安定させ、多収にも安定生産にも効果が高い。

③栽植株数（10a当たり）

3,300～4,000本

- (3) 目標収量（10a当たり）

6 t

○ 施肥基準

(1) 施肥基準量 (10a当たり・kg)

施肥成分	総量		基肥	追肥					
				1	2	3	4	5	6
窒素	化学肥料由来	8	8	3	3				
	有機質肥料由来	7.2	7.2						
りん酸	23		23						
加里	21		15	3	3				

【施肥設計及び施肥上の注意事項】

- 1 施肥設計にあたっては、堆肥中の有効成分を測定し、それを施肥基準から差し引き肥料の施用量を決定する。
- 2 基肥を抑えて初期の株のできすぎに注意し、心葉立ち上がりのころより肥効を上げるようような、追肥型の栽培をする。
- 3 結球始め前後から急激に養分を吸収するので、本葉10～12枚ころ（は種後35日ころ）までの追肥が重要である。

作型名	秋どり (高冷地)
-----	-----------

作型	標高 m	月		7			8			9			10			11		主要品種
		旬	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中		
秋どり	500 ~600						15~20	○ ~ ○	—————								■	仲秋 CRオリンピック ストロングCR 75
							5~15	○ ~ ○	—————								■	
	600 ~700						10~15	○ ~ ○	—————								■	
							1~10	○ ~ ○	—————								■	
	700 ~800							5~10	○ ~ ○	—————							■	
							25~5	○ ~ ○	—————							■		
800 ~1,000							1~5	○ ~ ○	—————							■		
							20~30	○ ~ ○	—————							■		
1,000 ~1,300							20~30	○ ~ ○	—————							■		
							5~25	○ ~ ○	—————							■		

○ 播種 ■ 収穫

○技術体系設定の前提条件

(1) 対象地域

飛騨 (標高500~1,300m)

(2) 立地条件

①気象条件

冷涼地では7~8月にまき、9~11月に収穫できる(作型図参照)。生育適温は18~21℃で結球適温は15~18℃程度なので、冷涼な気象条件を生かして栽培する。

②ほ場条件

根の吸肥力は弱く、乾燥、湿害を受けやすい。肥沃で深い土壤に適する。やせたほ場では黒斑病やほう素欠乏が発生しやすい。酸性土壤ではリン酸を排水の悪いほ場では根こぶ病が発生しやすい。

排水路を設け、降雨時の排水を早める。軟腐病や根こぶ病発生地は連作を避ける。

(3) 栽植株数 (10a当たり)

3, 800株

(4) 目標収量 (10a当たり)

6 t

○施肥基準

(1)施肥基準量 (10a当たり・kg)

施肥成分	総量	基肥	基肥
窒素	27	22	5
りん酸	28	28	
加里	27	22	5

【施肥設計及び施肥上の注意事項】

- 1 施肥設計にあたっては、堆肥中の有効成分を測定し、それを施肥基準から差し引き肥料の施用量を決定する。
- 2 施肥設計にあたっては、土壌調査 (pH、有効態りん酸) を行って土壌改良を行う。
- 3 基肥のうち、三要素各10kg程度は有機質肥料とする。
- 4 基肥は全量の約80%とする。